

統



第百八十八號



目次

統一主義の將來  
 靈格日蓮の愛國心  
 比律賓宗教事情と米國の教育主義  
 共同一致の精神  
 法華經講演集  
 報道廣告等

本多日生  
 小笠原長生  
 井上一次  
 關田養叔  
 本多日生

統一主義の將來

(雜司ヶ谷大學林新年會席上講演)

本多日生  
熊井本光筆記

予は慶賀すべき本大學林の新年會に列し、こゝに諸君の健康を祝し、併せて新年の所感を述べ、之を祝するは尤も強き意義の一であらう、若し新年を迎へても、その中に就いて將來に希望の光明を認めて之を祝するは尤も強き意義の一であらう、厄難が來ると思へば、決して目出度ことはなからう、例せば厄年の迷信を有する人が、四十二の新年を迎へたならば、之を祝さないで、寧ろ早くこの一年の経過せんことを祈るであらう、之を以て見れば新年を祝するには、必ず將來の光明を認むるの意義あるは明かなりと思ふ、

諸君、諸君は法華經主義、日蓮主義の擁護者として、終生社會に立つて貢獻せんとするのであるが、若しも

この主義にして將來發揚の見込なしとせば如何、苟くも宗教家を以て世に立つには、その奉持する所の主義信念は、確然尊ぶべからず、生命を捧げて尙ほ且恨みなきはどのものでなければならぬ、その主義が將來次第に衰退し滅亡するものとしたならば、如何なる心持ちがするであらうか、門松が衰亡の運の一里塚であつたならばどうであらう、近來堂々たる學者で宗教の將來を論ずるを聞くに在來の歴史的宗教は年一年衰亡して、之に代はるに精神的宗教が起るであらうと云ふのであるが、果してこの説の如くに歴史的宗教が年々に衰亡するとせば、諸君の立場は秋風落日の悲境にあると云はねばならぬ、之に就て少しく所見を述べて見たいのであります

宗教の興廢は無論法と人との兩面より觀察すべきであつて、教義は完全であつて、光明を有するも、之を護持する人に缺けて居るものがある、之に反して教義として已に缺陷多きを認めらるゝも、之を宣傳する人に於て、實際的活動の上に、光を示めして居るのもあ



る又教義も人も俱に滅びたる過去の遺物もあり、又教義と人と相待つて將に大に興らんとするものもある、予は法華經の統一主義なるものは、この第四の場合に位すると信するので、將來興立する曙光を認めて、衷心より歡喜に堪へぬのである、人或は之を目して盲信なりと云はん、されど予としては決して盲信ならずとの意義を認めて居るのである

元來宗教家が修養を積むには、我が奉ずる宗教の主義が、完全である超勝して居るとの、確信を基礎とせなければならぬ、若しこの信念なくして雑多の研究を開始するならんには、研究的知識は適當に消化せられずして、却つて懷疑の人を造り、若しくは薄志弱行の徒を出すのである、近來學究先生の口吻に倣ふて、諸種の研究を積み、各種の宗教を比較研究し終りて、而る後に信仰は決定すべきものであつて、明りに或る種の信仰を定むべきでないと思ふて居る僧侶も、多いやうであるが、此は非常なる誤解である、謬見である、佛教は知識と信仰との調和を教ふる宗教であり、特に日

蓮上人の主義は信智融合の大教義であるから、如何に研究を進むるとも理性の發達を恐るゝ點は少しもないが、この研究を進むる上に、信仰は確然として守持せられて居らねばならぬ、研究の前に信仰があると云ふことは、一寸學究先生から考へたら、不都合の申分と思はれやうけれども、決して之は不都合でない、否この信仰の力に由つて研究をも進めて行くのである、上人の聖訓に行學の二道は信心より起る、行學たへなば佛法あるべからずと仰せられてあるが、造次にも忘れてならぬ明誨である、吾人の心理には求知の欲と共に絶對に依信する信仰性を具へ有つて居るので、道德的感應の心とか宗教的信仰の心と云ふやうなものは、知力が生むのではない、知力によりてその信仰の正邪を見分けるとか、或はその基礎を造るとか、或はその動搖を防ぐとか云ふことは出來やうけれども、信仰の酔乎として醉なるものは、人間心理の靈妙性から發現して來るので、決して研究の已後に生ずるものでもなければ理性の眷屬でもない、寧ろ理性はこの信仰の前

驅となつて働くことばあろうけれども、之が親ではない、故に佛陀は信は道の元、功德の母と云ひ、五十二位の中には十信、十信の中には信心が第一位に位して居るので、利智第一の舍利弗すら以信得入の訓誨を蒙むつたのである、大涅槃經に「智慮ありて信心なきは邪見を増長す、信心ありて智慮なきは無明を増長す」と説かれてあるは、佛子の一日も忘すれてならぬ慈訓である上人もこの經文を顯諺法抄の中に引證して信心の大切なることを教へられて居ります、上人は尤も信仰に富んで居られたので、日本第一の智者と成し給へと祈られたのも、智者と成し給への語は智解の方であつても之を祈られる點は信仰性である、四信五品抄等に由れば信仰の上に力を注がれて居ることは、極めて明白であります

さて話が横に入りましたが、近來世間の學者が理想して居る將來の宗教とは如何なるものかと云ふに智識と信仰との調和を計り、哲學を無視しない宗教でなければならぬとか、又は西洋の一神教的思想と東洋の汎神

教的思想との接觸に由りて、何物か新たな宗教が建設せらるべきであるとか、又は宗教は倫理化すべきで、尤も多く倫理の爲めに努力する宗教が興立するであろうとか、又は靈と肉とを併せて尊重する主義の宗教が起るならんとか云ふのであります、これ等の希望が法華經の統一主義と如何なる關係あるか、之に就いて尤も嚴格に考察することは、眞に愉快なることであります

今廣き意義よりして法華經の統一主義を考察致しますれば、政治上に於ても尤も多大の光明を賦與するものである、見よ近來何れの國に於ても發展を理想せる國家である已上、必ず帝國主義に傾いて居ることは明かである、尤も武力的侵略を主とするものと、經濟的通商に依りて擴張せんとするものと、又更に優越せる文明に由りて他國を保護指導する主義を取るものとの別こそあれ、何れも國防は進んで擴し廣げる力がなければならぬとの自覺を有つて來たのである、この國家經綸の大事に就いて、法華經の主義を見るに、若説俗



間經書、治世語言、資生產業、皆順正法と説いて、政治を尊重し、經濟を尊重するは勿論、更に法華折伏の大義は正を以て邪を擯く正義の進軍を認め、更に立正治國の本旨に於て、卓越せる大徳教を立て、眞正の文明を以て世界に臨むの大方針を教へ、又人格の向上に就いては、佛性の根本より教へて、片々たる一時的説明を斥け、根底あり、意義ある道義を發揮して居るのである。

又我國の内政として尤も苦心せる點は、地方の自治機關の發達完成であるが、如何に苦心しても、畢竟之に干渉する人々の人格から導かなければ、到底この希望を達することは出来ぬ、而してこの人格の感化は徳教風教を尊重することより始まるのである、この本を培はずして末を逐ふても、決して目的は完ふせられぬのである、更に内政上の憂慮としては勞働者の救済問題である、表面にこの聲は高くないけれども、事實は切迫して居る大問題である、この解決も到底法律の力では完ふすることは望まれない、是非とも富者資本家が

精神的に慈悲仁愛の心になつて、共同生存の意義を樂むやうにならねばならぬ、又救済事業の發達に就いても、如何に計畫者があつて苦心した所で、國民の思想にこの慈善の精神が勃興して來ない已上は、その發達進歩は決して見られない、而してこれ等の精神を造り出すものは何であるか、即ち徳教風教の振起である、學校教育の効果が少ないとか、社會の風潮が悪いとか、家庭が不健全であるとか、何とか彼とか、互に非難しやうて見た所が、結局一國には徳教を尊重し、宗教の完全なるものを振起せしむるに至らずば、この大缺陷を充たすことは出来ない、而してこれ等の各方面を調攝して、尤も積極的の道義を教ふるものは、法華經の統一主義である。

基督教にもせよ、佛教の他の主義にもせよ、近來は人生を尊重し、現實の世を重視する傾きを示して居るは明白であるが、然しその教義の開創の當初に於ては、丁度反對の方向に向つて居たので、之を改造しつゝ、あるは容易のことではない、然るに法華經は經典よりし

て、この人生を輕視せざる意義に由りて、常不輕品の如き説も示めされ、獅子は即長者子なりとの自覺も與へられてあつて、現代及將來の徳教としては、尤も適切な教訓を有して居るのである、況して上人に至りては立正安國論となり、又日本の柱とならんとの大誓願となつて現はれて居る。

次に哲學と宗教との關係に就いて、將來の傾向を見んに、我が法華經は眞に有望の位地に立つて居ると思ふ西洋の哲學も大體は同一の範圍に歸着して來たので、今日では一元哲學が優勢を占め、「力は心なり心は力なり」と云ふやうな、物心の本元を一個の活動的の本體に於て認むるのでありますが、この一元の思想は法華經の一實論の説、即ち一相一種にして萬有の本元は色心不二の一念にありとなすものと異なるので、法華の實相論は今日の哲學の傾向に見て些の困難を感じない、又近頃井上圓了博士が哲學新案と題して、西洋哲學の未だ道破せざる新説を發表せられました、その因心説もこの總在一念の説と異なるやうである。

又その相合説の如きも法華の互具論と全然同一なりと信するので、法華經は方便品に於て哲學的基礎として實相論を明かし、壽量品に於て宗教的建設として本佛論を示めされて居るので、本經からして哲學と宗教との調和を示めし、理性と信仰との一致を教へて居るので、他の阿彌陀經が感情的に彌陀の誓願を説くに止まり、哲學的基礎を缺いたり、般若經が抽象的實在の一面を骨張して何等温かき宗教的意義の調攝せられて居ないのとは眞に年を同ふして語るべからざる、超勝卓越の大宗教であります、之に加ふるに天台智者大師の如き理性に長じた大偉人の出で、縱横無盡にこの經の深意を開發し、又日蓮上人が知られて、天台の理性を一轉進して遂に大信仰に突入し、こゝに理性と配合せる大信仰を開示し給ふたので、信智一體の妙教は屹然として東西宗教の最高點に立てられて居るので、彼の淨土門の人々の法華經の堂々たる理義を、攝道門など云つて拒斥して、横道に避けて、纖弱なる感情一片の信行に甘んずるものとは、大に面目を異にして居る。



ので、將來の宗教としての欲求は、この法華經に在りて已に満たされて居るを自覺せざるは、今日の學者の一大缺點なりと云ふも、斷じて過言ではあるまいと思ふ。

次に道德と宗教との關係に對する將來の希望に於て、法華經を考察するに、是れ亦真に愉快なる教義を示めて居ると思ふ、先に出せる若説俗間經書、治世語言、資生業等、皆順正法の文は、この希望の全分を尤も周到に言明せるものであつて、日蓮上人が開目抄に在りて三道の貫申を論じ、外典を佛法の初門となせし如き又立正安國の意義を論明して、法を知り國を思ふの誠忠を活現せられし如き、實に尊とき教義である、或る者が道德萬能に酔ふて宗教の眞價を知らず、或る者が明りに超倫理を唱へて信仰と倫理を強いて二分する如きは、この妙經の大理想に接して、始めて矯正せらるべきである。

又文藝上の問題として靈と肉との適當なる配合を見んとし、靈肉調和せる文明を建設せんなど云へることも

を迂遠の方に將ち行かすして、凡へて充足世間と云つて、この世間を充足せしむる活動を尊重することになつて居る、上人の實行はこの法華經主義の結果であつて、決して上人が權略の爲めに、彼の生々活動の動作をなされた次第ではない。

更に宗教根本問題としては、一神的思想と汎神的思想の接觸に由りて、何物かを生み出さんとて、識者の間に期待されつゝあるが、果して如何なる主義をか開發し來るのであらうか、予は之に就いても法華經は正しくこの兩思想を調和せる大教義なるを信じて疑はないのである、見よ方便品に於て汎神的思想の頂上に於て開佛知見と説き、如我等無異と説いて、一切衆生は平等に如來性あるを認め、寶塔品には十方分身の諸佛の來集を示めされて居る、是れ豈汎神思想の全面にあらずや而して壽量品に來りて之に對して生佛の關係を父子に見、而して諸佛には統一あるを教へ、天月池月の關係を以て本佛述佛を明かし、斯くて統一神教を開示し來り汎神と一神との思想を結束せられて居る、この間の

己に法華經に於て解決せられたる問題であつて、經に煩惱を斷せず五欲を離れずして菩提を成ずるを得べきを教へ、常不輕菩薩に托して人生を尊重するの理想を示めし、我れ深く汝等を敬みて敢へて輕慢せず云々と説き、法華經の反對者を呼ぶに、輕賤人間者を以てせるを見は、如何にこの人生の生活を尊重して、絶對の信仰と一致を示せるかを味ふべく、理想と現實の調和は實相論の根底より起りて、世間相常住の妙説となり、諸種の光明ある教訓となつて示されて居る、上人に至りては五節句の時も南無妙法蓮華經と云ひ、子の誕生を祝ふても南無妙法蓮華經と唱へ、女房と酒うち飲んでそこに信仰の光を見るべく、宮仕のそこに信仰の力を來らすべく教られたは、諸君の知らるゝ所であつて、斯くて日常生活と信仰とは相依り相扶けて、靈肉共に喜悅に満てる健全なる社會を實現し得るのである。

理想と現實との調和は、佛陀の上にも生身即法身の説として示めされ、淨土の上にも我此土安穩の妙説となり、成佛の上にも當體蓮華の妙旨となり、斯くて理想

法華の説相とその深意とを窺ひ、更に上人の開目抄に入りてその統一神教的の妙談を味ふならば、今日の識者が期待せる將來の新宗教なるもの、何ぞ知らん法華經主義日蓮主義の特色として、夙に我大日本帝國に建設せられ、「一閻浮提第一の本尊此の國に建つべし」との大理想として存在せしに驚くならん、是れ決して門内二三子の爲めに論ずるのではない、諸君こゝに統一主義の絶廣絶大を認むるの時、法を知り國を思ふの志に於て、人知れずホ、笑まるゝではありませんか。

更に歴史的宗教は衰亡に歸し、精神的宗教之は代らねはならんとの説に就いて、予の所見を述べんに、彼等が歴史的宗教の考察に於て、法華經の大主義を逸却して居るのは真に悲むべきことであつて、元來法華經の如き大宗教に於ては歴史を超越して萬古に不朽なる大真理と、又一面にはその時代その邦國の間に適應して變化して行く側とが、併せ示されて居るので、變はるが妙でもなければ、變はらぬが妙でもない、變はるべきは敏活に變はり、變はらないものは濼乎として千歲不磨



でなければならぬ、之を法華經では權實と稱し、方便知見波羅密者己に具足せりと説かれ、釋義としては四悉檀と云つて、不朽の第一義と、隨應の世界、爲人、對治の三義とは、活ける生命を有して運用せられて居るので、上人が教、機、時、國、序の五綱を立て、開教せられたるも、この活釋より出でたのである、されば歴史の宗教と云ふ語に、固形せるものとの意味を含ませ精神的宗教と云ふ語に何等の確定せる教義をも有せぬやうな意味を示めして居るのは、兩者共に不完全なる考察であると思ふ、宗教は必ず具體的の信仰の對象を要し、又信仰には必ず不朽の權威が加はらなければ、力あるものとはならぬ、これは宗教に限らない、道義の方でも矢張りそうであつて、不變の體道と推移する用道とが相俟つて、尊嚴と功果とを全ふするのである、故に勅語にも「皇祖皇宗の遺訓」と云ふことを宣し給ふので、儒教では「先王の道を行ふて過つものは未だ之れあらざる也」と教へ、法華經には五佛同道と説かれて居るので、この不朽不磨の點から考察すれば、

所である

己上述べた所に由りて、法華經主義の將來有望なるは大體明なるを得たりと信するが、さて之を擁護し宣傳する人に於ては如何と云ふに、之に就いては悲觀する人が多いやうであるが、予は決して悲觀すべきでないと思ふ、今日は日蓮門下の各教團に於ても、大に覺醒の機運に向つて居るのは事實であつて、各教團の青年の内には、勃々たる回天の壮志を抱いて、今や破窓の下に道念を練り修養を積んで居る人が少なくないの、この道念の潜在力は遠からずして發現し來るであらう、之に加ふるに社會の各方面より促す要求は非常に強いやうに感するのであつて、丁度法華經の信解品に説かれた、長者の子が流浪して居たのが、偶向本國として、たまたま本國の方へ向ふて還りかけたと云ふ有様と思ふ、今や法華經の研究と云ひ日蓮上人の鑽仰と云ひ、識者の間にも青年の間にも、非常の勢を以て勃興し來つたので、この社會の要求と門内の覺醒とは相俟つて、この主義の一大發輝を來たすは、知者を俟つ

ば、歴史ある宗教が尊いのである、而してこの歴史を有する宗教にして、前來述べたるが如く將來の思想界に光明を有するならば、この位喜ばしいことはあるまい、元來宗教は純理的に傾く時代と、形式的に傾く時代とはあらうけれども、純然たる理論の宗教では、決して人々の依信を繋ぐに足るものでない、又即りに形式に囚はれ、化石的信仰に陥りては、無論宗教の功果は失ふものであるが、歴史ありて而かも生氣あり活力ありて、時代を指導するに足る主義を失はぬ宗教があるならば、これ位尊いものはあるまい、法華經の統一主義は即ちそれである、諸君眞に慶賀すべきではありませぬか

諸君は、人としての基礎には、大聖釋迦牟尼と聖祖日蓮とを有し、法としての基礎には、妙法華經と御妙判とを有して居るので、この大偉人とこの大經典とに依りて立つ己上、諸君自身が適當なる修養を積み得たならば、必ず宗教家として將來多大の貢獻を、國家と人生の上に捧ぐることの出來るは、毫も疑を容れざる

て後知るべきでないと思ふ、予は上人出世以來六百數十年、この間に於て統一主義の發展に適せる時機は、今日に優る時はあるまいと思ふ、今後は迫害冷遇と戦ふにあらずして、却つて識者具眼者の方から招待せられて、その主義の宣傳に對する教家の修養の足らず素養の缺けたるため、狼狽するやうの次第ではないかと思ふ、されば今日より拳々として研鑽を怠つてはならぬのである誠に目出度いことではありませぬか、切に諸君の健康と行學の成辨とを祈ります (二元)

悦ばしい識生を五濁惡世に受くるといへども、一乘の眞文を見聞する事を得たり、經蓮恆沙の善根を致せる者、この經にあひ奉りて信を取ると見へたり、汝今一念圓喜の信を致す爾蓋相塵惑塵道交疑ひなし

(聖語)



## 靈格日蓮の愛國心

一月廿三日東京會社に於ける天晴會例會の講演

海軍大佐子爵 小笠原長生

昨年の夏頃、私は一友人と日蓮上人の國家觀に就て意見を聞はしたことがある、其後本多上人に御目に懸つた節、愚見の大意をお話し爲たところ、本會でそれを申し述べて諸君の高教を仰いだらどうかと、切にお勧めを蒙つたので、遂に今日清聴を煩すことにしたのである。

そこで先づ友人の意見はと云ふと、他にも往々耳にするところであるが、大要左の如き意味なのだ。

日蓮上人の國家觀を研究するには、第一に上人には二個の異つた資格のあることを認識せねばならぬ、其の一つは日本房州小湊の旃陀羅が子と産れたる人格日蓮で、他の一つは上行菩薩の再誕たることを自覺せる靈格日蓮である、上人の遺文録を讀むと、或る場合には非常に日本を謳歌賞揚して居つて、熱

烈なる忠君愛國家たるの觀があるが、或る場合には口を極めて日本を法華經講誦の惡國と罵り、蒙古襲來は必然受くべき天の冥罰であると叫び、飽まで起國家的なる態度を示して居る、如何にも前後矛盾せるやに見ゆるが、併し前に云ふた二資格あることに着眼すれば自ら此の疑は氷解さるゝ、即ち日本を賞揚して居るのは日本國民としての愛國の精神より發したる見地であるし、又起國家的の言あるは上行再誕たるの見地に立てる場合である、故に當然の結論として、靈格日蓮起國家主義と云はねばならぬ云々。

之に對して私は同意を表さなかつた、と云ふものは人格と靈格とを問はず、飽まで日本々位なのが上人の眞面目で、又それが上行の再誕たる證明ともなるのだと信じて居るからである——全躰なら人格的上人上行再誕たるを自覺したときには人格即靈格たるべきもので不二と見るのが私の本旨であるが、説明の便宜上人格靈格と分けて論ずるのであることを御承知ありたい——今假りに上人より全然日本國民たる資格を取り除き、

で(一)の場合は普通に謂ふ所の愛國心で、

○日蓮生を此の土に得たり豈我國を思はざらんや

○此れ偏に國土の恩を報せんが爲め也

○身命を捨棄し國恩を報せんとす

○日蓮は日本國には第一の忠の者なり肩をならぶ人は先代にもあるべからず後代にもあるべしとも覺へず

等の言がそれである、(二)の場合には單に愛國と云ふ許りでなく、更に深い讚嘆の意が籠められてある。

○我日本國は一閻浮提の内月氏漢土にもすぐれ八萬の國にも超へたる國ぞかし(中略)第一天照太神第二八幡大菩薩第三は山王等の三千餘社晝夜に我國を文はり朝夕に國家を見そなはし給ふ

○日本一州は印度震旦にも似ず一向純圓の機なり恐くば靈山八年の機の如し

○佛日西に入て遺耀將に東に及ばんとす、此の經典東北に縁あり(中略)予此記文を拜見して兩眼灑の如く一身悦を偏くす(中略)天竺に於て東北に縁ありと

再誕せる上行菩薩とのみ見るも、佛祖より受けたる使命上、絶對に日本の御國體を擁護せねばならぬと考へて居られたと云ふ大理由が儼として存して居るのである、而して之を證明するが爲めには、先づ上人の國家觀にも亦、日本を相對上の區域的に觀る場合と區域を超絶したる靈國的に觀る場合との二様あるものとして研究するのが便宜である——尤も之も本旨は區域的即靈國たること勿論である——そこで此の二様の觀察あるものとして、之を上人の二資格に配すると、自ら左の四つの場合が生じて來る。

- (一)、人格日蓮として區域的日本を觀察する場合
- (二)、人格日蓮として靈國的日本を觀察する場合
- (三)、靈格日蓮として區域的日本を觀察する場合
- (四)、靈格日蓮として靈國的日本を觀察する場合

此の四様の觀察が時に應じ機に對して交も論述せられであるのだから、頗る複雑して居るやうであるが、靜に研究し來ると其の何れに屬するに論なく、安國の主張の一貫されて居ることが明瞭に知り得らるゝ、そこ



は豈日本國にあらずや

○日本國は一向に法華經の國也

等と言はれたるの類だ、(三三)の場合には權威を持して矯激なる警告的の言が多い(勿論指導的に言ふて居るゝこともあるが本論に關係が薄いから省く)

○今の代は外典にも相違し内典にも違背せるかのゆへにこの大科一國に起て己に亡國とならんとし候歎不便不便

○此國の亡びむこと疑無かるべけれども且らく禁を爲して國を助け給へと日蓮がひかうればこそ今までは安穩にありつれど法に過ぐれば罰あたりぬる也

○蒙古國の事既に近いて候歎我國の亡びむことは淺ましけれども是だに虚事になるならば日本國の人々彌々法華經を誘じて萬人無間地獄に墮つべし

等の如きもので、世の上人を以て超國家だとか國家を呪阻したとか評するものは概ね此場合に於ける上人の言を捉へ來るのであるが、上人の國家觀には尙ほ其上有るのだ、(四)が即ちそれなので、能生の靈國にし

て所生の我れも靈かくてこそ始めて唯一靈法たる法華

經の意義も光顯され得べしとの妙解なので、此處に至ると國と法とは靈の一字に融合せられたる不二の妙跡と觀せられて居る、上人の國家觀の本領は實に此場合に存するので、此妙觀を以て他の三の場合をも開會し來るべきである、而して此の法國不二の一大靈氣こそ進んで宇宙を統一的に靈化し、退いては世界道義の中心たるべきものであつて、上行たる我れの日本臣民たるは、本有の此の靈氣を以て全人類を救ふべき大使命を帯べることを啓發せんが爲なりと確信せられ、世界を以て日本帝國に修束し來つて居る。

○法華經にて靈山と説かれたるは日本國なり、法華經の本國土妙なる娑婆世界なり

乃ち此の見地に於ける日本なる語は、消極的に云ふも世界の生命とも中心とも見做されてあるので

○日蓮は日本國の魂

ならば、即法華經の魂で、又實に世界の魂であるとの大抱負なのだ、之を能く了解してさて驕つて(三三)の場

合を觀たならば、上人の激語熱罵は當時の國狀たる變相的邪惡を摧破して、本有の御國相——法より言へば國家的法華經主義——を顯現せんとする愛國の苦言であつたことは容易に首肯せらるゝであらう、されば上人を超國家的と言ふのは、一應は上人を偉大視するやうであつて、實は反つて凡人視すると言ふことになりはせまいかと思はるゝ、尙ほ之を詳説する爲めに上行出現に關する上人の觀念を觀察しやう、本佛出世の唯一目的であると謂はるゝ法華經の主張は如何なる點にあらうか、元より容易に説明し得るものではあるまいが、要するに中心を示して凡てのものを之に歸趣せしむる積極的統一主義に外ならぬ様思はれる、即ち迷門は宇宙觀、人生觀の統一で、本門は佛陀觀の統一であるのみならず、而も此の二門が又圓滿に融合せられて一妙法と顯はれ、對他の中心たると共に夫れ自身にも確乎たる中心を有して居る、而して特に注意すべは其の中心を現世に定めたことなので、十方世界の中では娑婆世界を中心とし、唯一本佛は此處を根據として教化

を垂れ、人類救済を第一目的として居る、之が最も大切な着眼點なので、上行の有する使命も決して此の外にはあるまい、そこで此の大任を負ふて末法應時の大導師たるべき上行菩薩の出現するに就て上人は如何に見解を下して居つたらうか、經文には閻浮提内とのみあるから、偶然的に何國へでも生れて可いと考へられたかと云ふに、決してそんな譯では無くて、確乎不變の大約束があると確信せられたのだ、其の約束とは即ち法華經の意義を有するを以て世界に冠たるべき靈國に上行が生れると云ふのである、試に之を解釋して見ると、法華經主義とは中心的統一を指すのであるから事の大小と時の場合とを問はず、苟も法華經主義と謂ふならば、其處に必らず中心と統一との意義が伴はねばならぬ、換言すると中心と統一とが缺けて居れば、法華經主義では無いのである、此の必然の推理として十方世界の中心たる現世界にも亦統一的資格を有する中心が必ずあるべく、上行の出現するのは此場所でないればならない、經文中の一大事因縁の一語は正しく之



を示したもので、此の語の意は衆生をして佛知見を開かしめんが爲めに世に出現するのを一大事因縁と言ふのだと説明せられてある、末法となつての佛法の主權者は上行菩薩で、之が應時の救済者即ち佛陀に相當するし、佛知見とは法華經の肝心たる妙法五字である、而して之を開かしむるとの意は、上行は法華經主義實在の場所に出で、之を啓發することなので、上行の方から五字を持參して出て來るものでないから、中心的統一を本有の國體とせる靈國ならざれば、上行出現に應じ得べき法華經有縁の國とは言はれない、されば上人は日本國を以て一向に法華經の國なりと斷言せられて居る、ところで一面から觀ると十方世界其の儘が妙法の姿だと言はれるのであるから何處でも上行出現に差支へないやうにも思はるゝとの談論も出やうが、それは單に普偏的理論上の談義なので、實現上には縁に隨つて夫れゝ區別が出來、何處でも同じものだと云ふやうな漠然たるものではない、方便品で佛種は縁より起ると説かれてあるのも此の意味なので、即ち日本

帝國に上行が出るに就ての上人の觀念を推測すると、普偏的妙法は因をなし、日本帝國の絶對の靈位を戴き奉り億兆之に無限の歸依を捧げて居ると云ふ中心的統一の萬國比なき御國體（法華經主義の國家的實在）なる唯一の縁に隨ひて上行は臣民と生れ、其使命たる中心的統一の靈氣を益々開顯して全世界に及ぼし遂に之を靈化して娑婆即寂光土を實現するの果に到達せんとするので、上人は佛法即ち無上道は必ず日本より出づべきなりと言はれて居る、即ち日本は能化、世界は所化日本は法華經の體、四海歸一は用道であつて、法と國とは不二のものと認められたれば、元より其運命を同ふせるものと考へられて居る、されば時に矯激の言を放たれしは、國民に覺醒を促す爲めであつたことは一點の疑を挿むべき餘地もなく、蒙古襲來に對しても之を警告の道具に使つて居つたことは、愈々襲來となつた際小蒙古人大日本に來ると記されたのでも明瞭で、西戎を調伏するのは自分より外に無いと言はれたのが眞意であると私は確信する。

以上述べ來つた如く上人は日本を以て唯一の靈國と認めたと結論するに就て、尙ほ疑問を解いて置かねばならぬことがある、それは靈國の靈氣を啓發すべく出現する上人ならば之を歓迎するとも迫害する譯が無さうなものだ、尤も法華經には繰り返へしゝゝ大迫害に遭ふべきことが記されてあるが、一方の一大事因縁と云ふことゝ矛盾して居りはせぬかと考へる人があるかも知れぬが、併し深く考察し來ると、これが愈々上行出現の證明となつて居る、それは上行は一大事因縁を以て法華經主義即ち中心的統一を本有の國相として居る國に生れべきのだが、神力品に上行は能く闇を滅すると記されてあることに留意せねばならぬ、即ち唯一靈國の靈氣も日月雲霧に蔽はるゝと均しく、一時妖氣に鎖され變相を呈する時代があつて、其の時代に上行が出現し此の妖氣を拂ひ本有の靈氣を開顯せんとするの謂いで、それが爲め迫害の豫言もあるのではなからうか、之を事蹟に徴するに武臣政權を恣にしてより御國體に戻れる變態となり、殊に北條氏に至つては顛倒

の極に達して居て唯々恐懼に堪へぬ次第である、そこへ日蓮上人が生れて來て一王一佛の大義を絶對に主張して居る、又上人が口を開けば常に國と法とを並べ論じて居ることも、等閑視してはならぬ點なのだ、立正（法）安國（國）と云ひ、無間天魔（法）亡國賊（國）を云ひ、純圓の教純圓の國と云ひ、國敵佛敵と云ひ、佛法漸く轉倒しければ世間又濁亂せりと云ひ、法を知り國を思ふと云ひ、國家を祈りて佛法を立つべしと云ひ、法華經を識るものは世法を得べしと云ひ、御みやづかひを法華經とおぼしめせと云へる等、皆法國不二の妙觀に胚胎して居るのである、是の如く正法を啓くのが靈國を擁護するの道で、又靈國を擁護するのが正法を啓くの道であれば、上行としては尙ほ以て不惜身命に御國體を擁護するの大任務を有すると自覺されたのだされば極力權教を破すると共に執權北條を詰責すると峻烈を極め「權の太夫殿は民ぞかし所従が主君を敵とせんをば正八幡は御用ひあるべしやいかなりければ公家は受け給ひけるぞ此は偏に只事にはあらず」と憤慨



し、かゝる靈國をして變相を呈せしめたるは國民思想指導の任にある宗教家の罪なりと斷じ、尙ほ北條氏を反逆人と公言して憚らない、されば執權は上人を以て佛法に事寄せて政道を亂るものと認め、又後世上人を議するもの、中には、上人は政治的野心家で北條氏を仆さんとして失敗したのだとの評あるは、寧ろ上人の國家觀を側面より説明したるものとも見られ、又以て如何に上人が全力を盡して本有の御國體を開顯せんとしたか、推知される、殊に又上人が宗旨建立に先立ち伊勢の大廟に参拜したことや、弟子檀那等に遺せし最後の書に自己の立場を世界に取らすして、日本國の柱と云ひ、日本第一法華經の行者と稱して居ることや、示寂の際に立正安國論を講じたことや、日像師に正法を天聽に奏聞すべきを遺言せること等は、其の國家觀に關する事實上の説明で、決して輕々に看過すべきことではない。

以上は友人に答へる爲め自ら擧らず理論上より愚見を述べた譯であるが、上人を以て末法の大導師と信じて

御方より、歸朝の節は旅行みやげとして何か宗教其の他の事に就て、視察談を致す様にとの御依頼を受けたのであります、然し旅行期間の短かつたのと旅行區域の狭少であつたのは、比律賓の全體を觀察するに甚だ不充分なりしのみならず、宗教及教育に關する事の如きは、私の如き門外漢の能くする所では無いのです、僅ばかり見聞いたした事實と、二三の調査せる結果とを述べて、諸君の高教を受けたいと思ふ、若し幸にして、世界を統一し人類を徳化せんとする日蓮主義を研究すべき、此の天晴會の目的に對し、幾分の參考に供するを得ば、望外の至りでありませぬ、先づ順序として

### 比律賓に於ける昔時の宗教

から述べて見れば、元來比律賓の面積は、我が本土、四國及び北海道を合した位であるが、其の住民は八十四の種族より成り、言語のみにても三十七の多きに達して居る程であるから、其の奉ずる宗教も從つて種類が澤山あるべきは言ふまでも無く、

疑はぬ私自身は其國家觀をも理論を超絶したる信仰的に觀察して居る、謹んで按ずるに幕府政權を返上して王政古に復し、海内統一の聖世炳として御稜威八荒に耀き、國民亦日本帝國の大使命を自覺しつゝ、ある此の大御代こそ日蓮上人の國家觀に就いて、動かすべからざる説明者であると確信して居ります (完)

### 比律賓の宗教事情と

### 米國の教育主義

東京銀行社に於ける天晴會例會講演

參謀本部員歩兵少佐 井上一 次 講演

蒲場の諸君、私は昨年七月より九月まで、約二月ばかり、暑中休暇を利用いたしましたして、比律賓の觀光に出掛けました、出發の際は本會より日蓮聖人遺文全集を頂戴いたしましたして、船中は申すに及ばず閑暇ある毎に之を繰り、大に利益を得ました次第、是れは偏に御禮を申し上げなければなりません、猶其の際幹事の

現今これらの種族の大部分は、基督教を信じ、一部はマホメット教に歸依し、猶若干の異宗教を奉じて居るが、基督教及びマホメット教は數百年前に弘められたものである。

そして是等の種族の信仰は、以前より、造物主を以て最も尊きものとなし、此の造物主を、マガロ語で「バタラ」と言ふて其の語原はサンスクリットから出たと云ふことである、彼等の日常に禮拜して居るのは、祖先の靈魂で、寺院や會堂などはない、唯だ各人の家に祭壇を設けて、「アノトス」と稱する偶像を安置し、祭禮の時には豚や鶏の類を供へて音楽を奏する、それから死亡者あるときは、奴隷が殉死をする、これは我國古代の風俗に似て居る、此の外獸や鳥の類を尊敬し殊に鵜、鴉、緑色又は黄色の鳥類をも崇拜したといふことである、

現今異宗教として残つて居るもの、一例を擧げて見れば、バラワン島のタグバヌワ族の如きは、死者ある時は、之を森林中に埋葬し、埋葬前にはバルバルと稱



する神が之を奪ひ去ることを恐れて居るといふことである、バルバルといふ神は、常に空中を飛び四本の足には彎形の爪があると謂はれて居る、我國の天狗の様なものであらう、それから死者は埋葬後「タリヤクード」と稱する神の前へ出て審問を受け、其の際には自分の身體に附着して居る氣が代言人になつて答辨する若し娑婆に居た時に悪事を爲したものは、直に焚き殺され、善行を爲したものは、家屋を給せられる、また妻より先へ死んだ夫は、夫に先ちたる婦人と結婚し、夫婦同時に死んだならば、再び未來で結婚を爲し、斯様にして更に七回生れ替るといふて居る、我國にて楠公が七度人間に生れて此の賊を亡さんと言はれたが、是れらは佛教の六道輪回とか轉生とかいふ思想から來たのだといふことでありますが、これらは我國の宗教思想と多少類似して居ると申してもよい、

「ミンダナオ島等にあるモロー種族は、此の世界に「トラハン」といふ一の神あるを信じ、此の神は全智全能で到る處に存在し、人類が思考力を有し言語を有す

るは總て此の神の力に依るのだと言ふて居る、而して人類の生れる時は、額の頂より此の力を注入せられて脊髓から足の方へ達し、死する時は、再び額から抽き出されると信じ、若し現世に於て悪事を爲せば、火も無く空氣も無き地獄に放逐され善行を爲せるものは天國に到ると信じて居る、是は西班牙占領前の有様です

#### 西班牙占領後に於ける宗教状態

は如何かといへば、西班牙が比律賓を占領したる、第十五世紀の中頃に於ては、歐洲の宗教界は、新教の勃興と共にカトリック教の勢力が大に衰退した時であるから、同教の宣教師は盛んに新殖民地の傳道に従ひ宣教師は此の島の移住民の先驅を爲し、深く内地に入込み、村落に寺院を建て土人を導き土地の開発を爲した、現今でも是等の宣教師の建設した都府が到る處に存在し、「サントフェルナンド」「サントトマス」「サンペドロ」等と稱するものは、總て此の種の都府であつて、枚擧するに遑ない程である、そうして寺院の宏大なの

は最も人目を惹き、現今全群島にある寺院の数は約二千もあつて、全教徒の數六百萬人の約四分の一を、一時に收容することが出來るといふ位で、其の壯觀想ふべきである、

元來、西班牙は政教一致の方針を取り、爲政者も宣教師を利用して統治の用に供した、従つて宣教師の勢力は大に加はると共に、又漸次に弊害をも生じて來た、官吏と共に土人を抑壓するようになり、土人開發の恩人は一變して土地兼併の大地主となり、馬尼刺附近の寺院の土地にても、二十五萬「エーカー」の多さに達し、土人は一の小作人と異なるなきに至つた、斯る腐敗の現状は、千九百〇四年十月、タフト氏がノート

ルダム大學にての演説に明かで、比律賓に於けるカトリック宣教師は、富源の開発よりは寧ろ土人に蠻風のみを傳へたと痛罵して居る、米國の占領後、タフト氏は殊に羅馬に到り、此等の土地處分に關し、法王と協商したのであるが、其の勢力の大なりしを知る可きである、

カトリック宣教師の施設經營は、其の初めに於ては、大に見る可きものありたるも、次第に歳月を経ると共に斯様な惡結果を來したのだが、然し今日でも彼等の事業として觀るべきもの、無いではない、即其の殘存して居るもの、一として、特に注目すべきは此の島の氣象臺である、其の規模の廣大なる、馬尼刺に存するものは實に東洋第一と稱せられて居る、私も參觀したが悉く新式の機械を装置し非常に能く整備して居る、氣象に關する業務は今猶ほ全然宣教師の任する所である、斯る事業の見る可きものもあるも、要する所、政教一致の悪用は、遂に厭ふ可き結果を來したるは、甚だ遺憾の至りであつた、次に、

#### 米國占領後に於ける宗教の狀態

は如何かといふに、一千八百九十八年、米國が比律賓を獲得してより以來、諸般の秩序の回復せざりし間は宗教に對し別に何等の政策の變更もなかつたが、一千九百〇一年、米國の權力が、同島に鞏固に樹立せらるゝと共に、米國政府は直ちに信教の自由を許し、西班



牙の政教一致の政策を破壊した、それより「プレスビテリヤン」「メソジスト」等の新教が漸次に入り込み、現今では、米國の宣教師が約百人で、土人の教師は約四百人居る、教會室は百九十八で、此の外學校病院もあつて漸次其の勢力を擴張せんとして居る、

新教の数は三萬内外だといふが、新教徒は漸次に増加するであらふけれども、米國としては特に新教に對して保護を與ふることもなく、基督教に對しては一視同仁で、法律上の地位は自然同一である、然し基督教以外に對しては全然待遇を異にして居る、現今基督教を奉ずる地方の土人には、自治を許し、議員選舉權を與へて居るが、マホメット教を奉ずる地方の土人に對しては自治を許さない、知事の如きは政廳任命の官吏を以てし、議員の選舉權などは與へない、又其の他の異宗教者たる「モロー」種族に對しては、今尙軍政を施して居る、此の如く法律上の地位に差異あるは、畢竟開明の程度に因るものであるが、米國が斯る政策を採らうつゝある結果として、土人が持せる東洋的思想を歐化さ

せるに大なる力を有し、且つは基督教宣布の上に少からざる關係を有するものと言はねばならぬ、

以上で宗教の事情は大略御話をいたしました、これより教育の事を少しく述べて見たいと思ふ、それでは先づ

#### 西班牙占領時代に於ける教育

の状態から述べますれば、前に申した通り、米國政府は、宗教に對しては、西班牙時代と全然異つた方針を採つて居るが、一方に亦教育政策に於ても異つて居る、先づ西班牙占領時代の狀況に關して一言すれば、該時代の教育は、専ら宣教師の司つて居つたもので、宗教と相俟つて之を行ひ、成るべく土人をば無學にして置いて統治上に便利ならしめようとする消極主義であつた、それ故教授方法なども、字を讀むことを教へても書くことは教へなかつた、一千九百〇二年の統計に據れば、十歳以上の者で、約百分の四十四は讀むことは出来ても、字を書くことの出来るものは僅に百分の二十に過ぎなかつたといふ位で、如何に教育の振興を謀

らなかつたか、推知せらるゝであらう、然るに現今に於て執りつゝある

#### 米國の比島民教育の主義方針

は如何なるものであるかといふに、米國は比律賓占領已來、主として教育の發達に重きを置いた、元來米國が同島を占領するに至りたる米西戦争の動機は、玖把の人民を西班牙の虐政より救ひ出さんとの、人道主義の標榜より出たのであるから、米國政府が比島に於ける統治方法も、土人をして文明の域に進ましめ、其の幸福と自由を増進するを以て目的とし、其の第一着手として教育の振興を企畫したものである、故に教育費の如きは、全歳入の五分の一たる約四百萬圓を投じ、盛んに本國より教師を派遣し、現今米人の教師約千名を以て數へ、如何なる僻地と雖、學校の設立なきは無く、其の數約三千五百に達し、義務教育の制を採つて、就學兒童の數は現今約五十萬で、學齡兒童の約三分の一に及んで居る、其の教育の目的は、土人をして各々其の處を得せしめんとするを以て、主として實業教育

を施すのであるが、其の精神教育の如きは、全然米國主義を採用して居る、

現今、師範學校に於ける教科書の中で、比律賓人民の地位を明にし、國家に對する義務を教ゆる有様を觀るに、(一)米國の國體に基き、個人は國家を建設せる單位なることを教へ、(二)個人は、何故に國家が個人を支配する權能を有するかといふ理由を問ふべき權利あるを説き、(三)進んで國民は非政を施す政府は、無きに勝るからして、革命の權利をも有するを教へて居るそれから亦、愛國心を説くに至つては、(一)自國の歴史を誇り自己が公民たることを名譽とするの念を有し(二)常に勞働を好み、若し一朝事ある時には國家の爲めに犠牲とならねばならぬこと、(三)愛國心を以て單に外敵に對し本國を旗の下に戦ふのみと思ふが如きは甚だ狹隘なるものにして、國內にありても、利己主義にして腐敗せる政府、陋劣なる政治家、法律を無視するもの、懶惰にして無計畫なるもの、如きは、却て外敵よりも危険であるといふて居る、



斯る愛國心は、國風民情の異なる帝國の上に、直ちに律することは出来ないけれども、國民の國家に盡すべき精神を説くに至りては、實に餘蘊なきもので、而も其の採りつゝある主義方針が、如何にも大膽で公明正大で、而して旗色鮮明である、

そのみならず、學校に於ける教育に於ても、總て自國本位であつて、小學校の地理書の中で、我日本帝國に關する所を見たところが、日本は小なる國だが、東洋に於ける強國で、斯くの如く強國になつたのは、五十年前に、米國の指導の下に開國進取の政策を採つたからだとある、比島土人に對する教育としては實に適切なりと言はねばならぬ、斯る比島に對する教育政策は、果して米國本來の目的を達し得るや否やは分りませんが、唯其の主義のドコまでも一貫せる處は實に歎稱すべきものと思ふ、

以上を以て比島に於ける宗教の情態と教育政策の一斑とを概略説明し了りましたが、最後の

### 結論

的に之を捧讀させる位に止まり、戊申詔書の出るあれば、或る當路者などは大御心の存する所を知らずして急に國民に儉約を教へたものと誤解せしめ、勤儉貯蓄の詔勅などといふて、國民進取の氣風を阻害するに至る様なことになつた、こんな我國現今の状態では、眞個に國民思想の上に堅實なるの點を認めることは出来ない、彼を思ひ之を思へば、轉た寒心に堪へざる次第である、

今や國民的勢力競争の益々劇甚なるに際し、我が國民は鞏固なる信仰と堅實なる思想とを以て之に當らなければ、重大なる責務を有する我帝國將來の地位を確保することは出来まいと思ふ、

茲に至て私は我國將來の爲めに大に日蓮主義の活躍を望まねばならぬ、言ふまでもなく、日蓮上人の主張したる立正安國といひ、知法思國といふ教へは、國民の上に堅實不動の信念を決定せしむると同時に、我日本の歴史を尊重し、法華經に依て我日本建國の大精神を發揮するの主義である、即ち上人が「我日本國は開

として、之を概括して觀察するならば、西班牙時代に於ける政教一致の政策は、當初は能く統治の實を擧ぐることが得たけれども、爾後其の方法宜さを得ない爲めに、各種の弊害を生じた、それから米國占領後に於ては、宗教に對しては餘り重きを置かず、寧ろ現實的處世の方法を得せしむるを以て急務とし、宗教よりも教育に重きを置き、銳意其の効果を收むるに勉めて居るのである、之を西班牙時代に於ける宗教及び教育に對する方針と比較するならば、全然相反して居つて、今日の學校は、將に西班牙時代の寺院に代らんとするの觀がある、何れの方法が可であるかは、一の政治上の問題で無論一長一短であらうけれども、竊て我國に於ける現狀を見るならば如何であらうか、

國民の信仰に於て果して鞏固なる點があるであらうか、國民の教育方針に於て堅實なる點があるであらうか、教育勅語に於ては、國民趨歸の針路を示して明かなるも、淺薄なる教育爲政者等が、眞個に之を味讀し體讀せしめんとするに非ずして、唯だ學校に於て儀式

浮提八萬の國にも超へたる國ぞかし」といひ、元寇の時代に、上人が四百餘州を席卷せる大國蒙古を以て小蒙古國と貶し、蔑爾たる此の一小國を以て、大日本國と傲呼したるが如きは、即ち是れであらう、亦日蓮主義は、彼の一部の頑迷固陋なる愛國者等が、猥りに他國を侮り國自慢的に無闇に威張つて居るのでもない、即ち個人の眞價を發揮し自覺を興ふると共に、國民全體の上にも大なる自覺を促がし、國運發展の使命と天職とを教ゆるものである、而うして内に大德教を包んだる世界無比の王道を以て、萬國に君臨し、一切人類を徳化せんことを期するものである、上人の「日は東より出で、西を照らす……」といひ、「一天四海皆歸妙法」といふが如きは、此の大理想の發現である、日蓮主義は、三界無一物と澄まし込む世外的宗教でもなければ、天國や西方極樂へ逃込さんとする厭世宗教でもない、實に積極進取の活躍的主義である、何卒我國將來の爲めに共に奮つて大に盡さんことを望みます、亦實に天晴會の本旨の存する所も、茲にあると思ひます、



若し現今の狀態に甘んじて居るならば、寧ろ我國民は日蓮主義を、遠い米國あたりから開かねばならぬこととなるであらう。

今や聖明の代に際し國運隆々として進み、上人が安國論に言はれた様な三災七難が目前にあるわけでもないが、將來に於て、雄大なる米國民と東洋の天地に於て輸贏を争はんとするには、帝國民たるもの亦深く省る所がなければならぬ、然らざれば、他日何れの方面に於てか、他國侵逼の難に遇ふの時なきを期す可らずである、

斯る見地に於て本日自分の拙き講演が、此の偉大なる日蓮主義の研究團體たる、我天晴會員諸君の爲めに幾分の御参考たるを得ば無上の光榮に存じます、終りに臨み長時間の御清聴を汚したるを感謝いたします、

(文責悉く記者にあり)

(完)

いふ意味ではない、吾人が日蓮上人に同心し如同するといふことであるといふてゐる、一寸巧な解釋の様ではあるが、其實牽強附會の説で巧に失し過ぎたものである、日蓮上人の下に集るといふ事は異論ないが、妙に高い所へ持つて行かなくとも、異體同心といふことは共同一致といふ意味だから我々本化の仲間といへば日蓮上人の御精神を汲み取つた人々が互に心を協せて働くといふ、意味と尋常に觀ればそれでよいと思ふ、されば只日蓮上人に一如するといふが如きは、文字上の解釋としても、却て迂遠である、故に一言にしていへば、日蓮上人の御精神を汲めるものが心を一つにして、寄り集るといふことである、それで私は此語には本化獨特の精神が充分含蓄せられてゐると思ふから、餘り窮屈にしないで、少し廣い意味で本化修養談中の一として御話をしたのである。

前にも御話したことがある通り、此日蓮上人の御教訓をくむといふことを窮屈に考へて、數々見指出といふから寺を放逐されなければ、法華の心讀色讀が出来

左の一篇は大學林同窓會に於ける講演を筆記したるものにして文責は筆記者にあり

### 共同一致の精神

(本化修養談) 其四

關田養叔講演

吉田堅晴筆記

本日は本化修養談として「共同一致の精神」といふ事をお話しして見やうと思ひます、共同一致とか、同心協力とかいふ事は、吾人が世に處して行く上に於て何事を爲すにも、頗る大切なことで、我祖日蓮上人も御書中にこの事を異體同心と仰せられてゐる、併しこれが一般に共同一致といふ意味に適切に用ゐられてゐるか否かといふことは私は知らないが、異體同心といふことは語を換へていへば共同一致といふことに外ならないのであつて、甲と乙とは互に體は異つてゐるが心は一つにして、事を爲すといふことであります、誰であつたか名前は忘れましたが、この異體同心といふ語を異様に解釋して、吾人同志が共同一致すると

ない、斷頭臺に上る位のことになければ、本化の修養が積めないといふやうに考へてはならぬ、近來異體同心の御聖訓も實用に供することが少ない、總ての場合に用ゐてゐない、雜誌記者といひ、説教家演説家皆悉く人事百般に之を應用し指導し活して働かす人が極めて少ない、是は御書を讀むに心を留めて讀まないからである。

日蓮上人の御書になつたことは如何なる場合を問はず大なる目的があらせられて、御書きになつてゐるといふことを忘れてはならぬ、元來この異體同心といふ御言葉は「異體同心なれば、人々少く候へども、大事を成じて、一定は華經弘まりなんと覺えて候」(異體同心抄)とあつて一定法華經弘まりなん、といふ大目的との如き、大目的觀の上よりこの御言葉が出で、居るのである、學林の庭を掃除するとか、花園を作るとかといふ様な小なる所から出たものでない、併しながら小目的と大目的とは、常に一致するものであるといふこ



とは、忘れてはならぬ、故に吾々は此の大精神のある所を能く味ふて、如何なる場合にも事々物々、この異體同心の聖訓を應用し、常にこの精神に住して働かなければならぬ、常に互に喧嘩をなし朋友と和すること出来ぬ様なものであつたならば、天下のものと和することも出来ぬ、従つて大なる事業を成就することは出来ぬのみならず、天下の人を濟度し、感化することも不可能である、佛には和光同塵といふことがあつて、如何なる物の仲間にもなつて、助け救ふのであるが、若し吾人にして、人と相和する所の精神が欠けて居るならば、何人でも人を導き誘ふなどといふことは、到底出来るものでない。

日蓮上人の御精神たる、異體同心といふことは、要するに共同一致といふことで、如何なること、如何なる場合にも、心を合せ共同して其事に當るといふことが中眼であつて、これが又今晚の話の中心である、即ち共同一致といふことは、如何なる場合にも必要で、唯へば一家にしても、夫は夫、妻は妻といふやうに、

皆舉つて獨立の叫びを發した、この一致の心が出来たことを、始めて獨立の大目的を達することが出来たのである、尙近くは我日露戦争の如きでも、誰れやらが、誣ふた如く、「四千萬衆一精神」で、國民一致の精神があつたからである、軍人が強よかつたから勝つたといふのも、軍艦が揃つてゐたから勝つたといふのも、皆皮相の見解で、それは只舞臺上の俳優に過ぎない、畢竟勝つた所以の基づく所は五千萬の同胞が、共同一致して勝ねばならぬといふ心を抱き、天地間唯一人と頼むの愛子をも厭はず、國家の御爲めであると戰場に出して所謂異體同心的に一國の運命を賭して戦つたに由るのである、決して軍人が勝つたでもなければ、軍艦で勝つたでもない、政府が勝つたでもない、忠君愛國の精神に充ちたる五千萬の國民が勝つたのである故にこれに反して露國の如きは、國內に反旗を翻へすものが續出し、兵卒の中でも負た方がよい、さすれば壓制を免るゝことが出来るから、といふてゐる者が澤山あつたといふ話を聞いてゐる、即ち同體異心であつ

各心がまち／＼であつたならば、其家は必ず繁昌はしない、又國家といふ上から見ても同一で、上下交々相争ひ上は下を惠まず、下は上を敬はないといふ様で一致しなかつたならば、國運の發展は覺束ない、故に一家としても團體としても國家としても、この共同一致の精神がなかつたならば、隆盛發展はしない、されば教育勸語の中には「億兆心チーニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ」といひ、戊申詔書には「上下心チーニシテ」とありますが、是等の聖旨は深く感讀せねばならぬ、彼の亞米利加の獨立戦争は有名なことで、皆世人の知るところであるが、實に彼の獨立旗を翻へし、其目的を達するに至つたのは、ワシントンの力であつて、彼は一國の運命を双肩に擔ひ立たた事は事實であるが、又一方には、パトリックヘンリーの如き悲憤慷慨の士があつて、我に自由を與へよ、然らずんば我に死を與へよ、と迄叫んだ、これらの言葉は確かに米國を衝動し、一國の興奮劑となつたのである、爰に於てか上はワシントンの如きを始め、下は匹夫匹婦に至る迄、米一國の者は

たから、假令國は八十倍あつて、兵が強く、軍艦が澤山あつても、勝利を占むる筈がない、日本の勝つたのは實に國民一致の精神があつたからである、故に此の共同一致の精神は如何なる場合にも必要である。それで私は此の共同一致といふことに就ては、二つの要素があると思ふ、是も御書中に明らかに示されてゐるので、其一は消極的で自衛の策としての必要で、即ち自己の團體を守るに極めて大事であつて、日蓮上人も血脈抄中に「日蓮が弟子の中に同體異心の者これあらば、例せば城者として城を破るが如し」と仰せられてゐる、同體は至極よいが、異心で相互に内面で軋轢してゐた時は、开は單に形式に止つて、自衛の策を破り、自己の團體をも守ることが出来なくなる、即ち我一宗にしても、大學林といふ團體に共同一致の心が無かつたならば、大學林としての發展を妨ぐるのみでなく、一宗の發展を破り又此の團體の基礎を破壊するものであるといはねばならぬ、故に學林なれば教師生徒は相互に一致してこそ、其面目を維持し得るので



ある、若し共同一致がなければ、これを隆盛ならしむることが出来ないのみならず、同體異心といふて互に反目し合ふ結果、團體の成立を破壊するから、丁度城を守るべき兵士が、自ら自己の城を破るが如きことになる、されば上人の思召では、共同一致の精神は如何なる團體にもせよ、自衛の策としても無くしてはならぬといふ御精神で仰せられたものと信する。

次に今一つは團體の目的を成就する爲に必要で、これは積極的である、喻へば此處に一家の團體がありとすれば、必ず商業なり何なり目的がある、然るに下女は下女で朝寝、下男は雀子黨、主人は主人でしたい三昧、妻は妻、小供は小供といふ様であつたならば、巨萬の富を積んでゐる家でも、到底其の家の繁昌を望むが如きは、架空的妄想で、達し得べからざることである、譬へば我大學林にもせよ、學林は學林の目的がある、即ち日蓮上人の廣宣流布の大願を果すべき勇士を作り、其大願を成就せしむべく働けべき所、是が團體の使命天職である、然るに若し共同一致の心が無つ

時も忘れてはならぬ、吾等は業師といひ彌陀といひ大日といふが如き、虚偽の名によらず、又基督の神の如き見ることも出来ない、理論上よりも容易に破らるゝ根底なき、犬の遠吠のものによらず、徹頭徹尾此の宇宙法界に、温き大慈悲力を有し、吾人と膝を接して親しく教を受くることの出来る本佛にあひ、其の慈悲をば南無妙法蓮華經の七字によりて吸収することの出来る、純粹な信仰を獲得することが出来、これを汲みこれを私め、人にも信仰せしむると同時に自己も信するが信仰で又使命である、實に此の結構なる道念信仰を基とし、是れによりて集り仕事をせねばならぬ、只小人利によりて集るといふが如き汚れたるものでなく清き最第一の信仰即ち本化獨特の道念信仰をもつて、共同一致の基礎とするといふことが、上人の御教訓である、故に「日蓮が弟子檀那等自他彼此の心なく水魚の思をなして、異體同心にして南無妙法蓮華經と唱ふる處を生死一大事の血脈とはいふなり」(血脈抄)此の純粹なる信念がなくてはならぬ、只鳥合の寄合であつ

たならば、其目的使命を果すことは出来ない、故に上人は團體其のもの、目的を遂行する爲にも、共同一致の必要を唱へて、異體同心なれば萬事を成し……百人千人なれども一の心なれば必ず一事を成す(異體同心抄)と仰せられたのである、

日蓮上人は斯くも痛切に異體同心といふことを獎勵せられて居らるゝが、然らば如何なることを根底にして主張なされたかと申すと、此處には何か本化の特長といふものが無くしてはならぬ、それは本化佛敎の道念信仰を中心基礎として、共同一致が上人の思召であらせられたと思ふ、この道念信仰は吾人の生命であつて、又本化修養の中心である、此の信仰は三千大千世界に於ける如何なる寶よりも尊きものである、此の大信仰所謂宇宙法界の中に、大慈悲の御手を垂れ給ふ久遠實成大神教主釋迦牟尼佛に滿腹の信念を捧げ行住坐臥の間にも、其慈悲の中につゝまれ、其慈悲を慕ひ开を痛切に感じ、飯一杯食べるにも、衣を更ふる時にも、皆これ宇宙法界の温き慈悲の賜ものと感じて、暫

てはならぬ、人は此の世に何の爲に生れたか、如何なる事を爲し、如何に働けべきか、死してはどうなるか死に臨み怖長の念は起らないかと、そうして生死の輪道に處しても、人生の荒波に掉しても少しも怖畏の心なく、從容として事に當り、宇宙人世の上に大なる安心立命を得るところが即ち吾人の「生死一大事の血脈」である、之を日蓮上人が「而も日蓮が弘通する處の所詮是なり」と仰せられたのである、常に利を以てのみ集れる者は、利益なき場合には、忽ちに散じてしまふ尙甚、敷は食物の爲にのみ集れるのである、これ等は全く共同一致の基礎が、ないものである、日蓮上人の共同一致とは、本化獨特の道念信仰をもつて、宇宙人生の上に大恩安を得たるものが、家庭の人として國家の一員として、大に世の爲め社會の爲め貢獻せんとする確固たる人々の寄り集まるものである、此の主要素を欠いた共同一致であつたならば、自信ある結構なる仕事を爲し、大目的を達することは不可能である、要は起居動靜の間にも、常に道念信仰を以てるなければな



らぬ、然して此の道念信仰を以て築き集まれる團體であつたならば、永遠の基礎あるもので、如何なる大事業難事業をも成就し得る資格あるものである、それから又「異體同心なれば人々少く候へども大事を成じ……惡は多けれども一善に勝つことなし……この一門も亦是の如し「異體同心抄」と仰せられてあるが、吾人も共同一致の決心としては、常に此の確固たる結合力と動かさざる確信がなくてはならぬ、よし金があらうが、澤山の人があらうが、堅固なる結合力と正義の純信とを持つて居る所の「一善」には勝ち難いものである、故に最後の勝利は必ず我等の上にあるといふ、正義純信の大決心が無くてはならぬと思ふ。

次に共同一致することに就ては如何なる心掛が必要かといふに、是にも大體二つの要素があると思ふ、其の一つは服従といふことで、第二は相愛の念である、若し諸君の中にしても、上のものに下のものが服従しない、又生徒として教師に服従しなく反抗心のみ抱いて居たならば、一事として成就することは難い、故に

この服従といふことは極めて大切である。今一つは相愛の精神で同心抄の自他彼此の心なく水魚の思をなすと云ふ、是が肝要であつて、俗に所謂魚心あれば水心ありで、共に愛し共に助けあふ事が大切である、共同一致の要素としては尙他に色々あるでありませうが、高尚なる服従と相愛の念とは其主要要素であると思ふ、これ等に付しても幾多の聖訓がありますが今は略します。

要するに諸君は共同一致して働き、互に睦しく自己が立派になると同時に同窓をも立派にする心掛でなくてはならぬ、此の外如何なる境遇何れの社會に立つにしても、此の共同一致の精神を忘れてはならぬ、諸君が一致共同して共に共に學んで、上人の御心を汲み取つたならば、立派に偉大な効果を見ることが出来やうと思ふ、故に千里の道も先づ一步よりで、諸君が先づ以て相互の間に異體同心の聖訓を體面色讀して、本化門下の奉行者として説道者として、毫も耻ぢない様な立派な結果を實現してもらいたいのであります(完)

# 報道

## ○天晴會記事

昨年一月組織已來既に一ヶ年に達したるを以て一週年紀念祝賀を兼ね總會を二十三日九段發行社に舉行せり、當番講師及議題は第一席陸軍參謀員步兵少佐井上一次君「比律賓の宗教事情及米國の教育主義」、第二席海軍大佐子爵小笠原長生君「豊格日蓮の愛國心」、第三席大僧正本多日生君「天晴地明」にて、前後講演約四時間にわたり各自得意の研鑽を披露して、夫れより一同前庭に出で、紀念の撮影を爲して餘興の福引に移り、日蓮主義の格言、警世的諷刺、無邪氣なる滑稽など披露出で、「一切衆生の盲目を開くる功德あり」にて大學眼藥、「國に二人の王なし」にて、唯一人の君あるのみとて鶴翔、「佛樓の座蒲團」にて蓮華(ちり蓮華)、「天晴會の名称」にて雷の如く響き渡るとして雷お、「し、若輩ども二陣三陣に續け」にて巻糸(續々と續く)、「佛の慈悲」にて金杓子(すくひ上げる)等にて、會員一同笑ひどよめき各々お誦の宿誓へを爲し、これより

別席にて晚餐の宴を催ふし、先づ松本幹事の諸般の報告及び新入會員數名の紹介あり、次に幹事總代時博士及細野少佐の卓上演説あり、最後に近衛第一旅團長林少將の發聲にて天皇陛下萬歳及び天晴會萬歳を三唱し、最後に近々の内官命を帯びて南清に赴任せらるべき細野少佐の爲めに同く萬歳を三唱し、是にて更に感想談話を開き、醫學士千葉彌治馬氏の天然瓦斯發見談ありて一同歡會せり、當日の主なる來會者は、五島子爵、山石貴族院書記官、川島海軍大學校長、日蓮門下各種誌主幹、板倉中、鈴木天眼兩代議士、杉村、石浦各中佐等知名の士約八十餘名なりき。

## ○米國通信

前略、毎々御返送下され候「統一」に依り多大の法益に浴し候、のみならず、之に依て淨業に御精勵遊ばされ候現下平日の様子をも、返一承はるを得て欣喜此事に存じ居候、いれて生等同志の發起に係り候「日蓮主義妙教會」も追々其歩を進め目下は假本部に於て、毎月第三日曜毎に清會を催し會員も二十名内外に達し候、何れ来る立宗會頃迄には、本陣を據へ權團「獅子吼」をも印刷に附し、堂々たる陣を敷る所存在候、然しながら未熟の生等に候へ

ば、萬事御指南を仰ぎたく候、尙從來の如く「統一」の御返送は勿論其他日蓮主義に關する新刊書等時々御返送を得ば、そは小生一個のため而已ならず、會員全體の法益に候同何卒宜敷願上候、次に現下及其他の方々の教化に預りたる信徒の方々も、當地には頗る多きやに在候間、御心當りの人々へは入會の上、日蓮主義鼓吹の爲め一臂の力を添へられ候様、御申傳へ下され度候、勿論當地の邦字新聞へは廣告をも致候も、生在競争の激烈なるため宗教てふ事に係る暇なき人も多かるべく候も海外に於て日蓮主義を標榜して立ち候は、始めての事と信じ候間、可成的成功を奏し度と祈居候、何れ委細は時々御報申上る事とし是にて擧筆仕候恐惶不具

紀元千九百十年一月一日  
北米加州羅府アマリヤ街  
松本 本 光 拜

## 別紙

會 則  
名 稱  
第一條 本會を妙教會と稱す  
信 仰



第二條 本會は法華經を中心として本師釋尊を信仰の對象と仰ぎ日蓮上人の主義を遵奉す

目的

第三條 本會は佛陀の金言と上人の遺訓とを色讀し異體同心の實を擧げ以て社會改善の原動力たらん事を期す

會員、會同及機關

第四條 本會は在米同志を以て會員とし臨時會同をなし信力を増進し相互の親交を温む

（但當分の圓同覽雜誌とす）

第五條 本會は雜誌獅子吼を發行す

會費

第六條 本會には幹事一名會計一名を置く

附則

第七條 幹事は會員（諮詢の際會同者たる）半数以上の協賛を経て會務に従事す

東京顯本協會

人并に難波繁子女史の筑前琵琶福田春子嬢中藤ヨシ子嬢の琴グワイオンの合奏（六段）久城モト子嬢の琴（名所土意）落語數寄手品滑稽旅行鞍馬山天狗問答活動寫眞等にして何れも隱微を演ぜられ大衆の満足と興へしが中に於て最も喝采を博せしは活動寫眞にして就中日蓮聖人佐渡雪中の光景は會員をしてそのる六百五十年の往事を偲ばしめたり又最も滑稽なりしは落語の會員中比丘尼の變ひにてまめまめしく見蓋湯飲を運ぶなど滑稽至極なりし一同十二分の歡樂を盡し萬歳三唱の後散會せしは午後十一時頃なりき

○男信徒新年會五日午後六時開會式順は四日婦人新年會と同一にして修法法話配膳餘興（福引讀佛落語舞臺音機假裝行列）萬歳三唱散會と云ふ順序にして今宵も昨夜に劣らざる程の盛會なりし假裝行列の人物は技摩奴高嶽女學生松王丸武士大夫かむろ西行法師等にして何れも思ひ／＼に演じられたり一同散會せしは午後十二時頃と覺り來會者は或百四拾餘名なりき

○日蓮研究會十五日午後七時より同本行寺に於て日蓮研究會を開會せり始も盛收の事として講師及び會員の新年發會演説ありたり

本會は山根關田並川石川醫師の出演にて淺草に品川に講演あり、一回と進みて參觀者の増加しつゝあり、殊に今回淺草常林寺を根據地として、東京信徒結合の第一義會の設立せられ婦人結合の妙教婦人會の成立するあり、學生團體求道者のためにも一會組織せらるゝ由、而して此等の會には管長本多大僧正の毎回御講演あれば、彌々教益の曙光を仰ぐことになりぬ、

千葉縣教信

昨年來寺籍調査のために、本縣下多數寺院の調査も粗ぼ決了せるが、第二教區に於ては中村井口今井飛山の諸師が寺籍調査の爲に、諸方へ巡回するの必要を生じ、この機會を利用して各所に演説會を開會し多大の功果を取められたり

又第六教區に於ては小竹俊雄師専ら布教方面の事務を擔任し西松貳年度後半期には、各所に轉戦せられ、殊に區内屈指の大寺院たる法光寺本福寺の如き大修繕を執行する運びになりたる程、法益多大法運の發展を實現したるは、歡喜に堪へず

又第九教區に於ては夏目智誓師主任となり秋季巡回布教を各所に開會し、演説に若しくは

日なれ共當日は日蓮研究會なりしかば一日延期し十六日午後七時より婦人修養會と共に開く修養會は目今能仁上人より本宗綱要を講義されつゝあり法話後講師より法門上の試験的質問及び處世上に於ける宗教問題を顯本法華宗婦人として如何に處置すべきか等の問題を提出して會員は微言を傾け義論百出最後に講師の判決を乞ふ實に婦人修養會の名に愧じざる程の一大善美の會なり

天晴會講演録出づ

豫約中なりし天晴會講演録第一輯は昨年十月中に刊行せらるべき筈なりしが其後編輯裝訂等に幾多の變更と進歩を來し終に期限に後るゝに至りたるが今回彌々出来配布せられたり巻頭には聖祖の御眞蹟「天晴地朗」の聖語及び各講師幹事の骨像夏期講習會の光景等の寫真版を挿入したり頁數に於ては豫定より二百頁を増して八百頁の大冊となり其内容の豊富なるは言ふ迄もなく裝釘なども非常に立派なるものにて恐らくは今日迄我輩門下出版中の白眉と稱するも誇稱にあらざるべし天晴會幹部の談によれば豫約者へは既に配本を了りたるが猶ほ續々各地より購求の申込ありて殘本も甚だ僅少となれりと云ふ

幻燈に教義の布疋に努められ之又豫想以上の好結果なりし由、斯く何れも其の職に忠なるは、宗門のため慶賀すべき事なり

大學林同窓大會

一月七日午後一時より大學林内に開會 當日來會者中主なるは、本多大僧正を始め、野口、今成、關田、井村、藤崎等の諸師にて幹事先づ開會の辭を述べ、次で今成會長の講演更に適當會員の五分間演説ありて、最後本多大僧正の講演了るや直ちに宴會に移れり、餘興としては、談曲獨吟、薩摩琵琶、手品、詩吟等ありて極めて盛會なりしが、六時三十分萬歳三唱の下に散會せり

岡山通信

岡山信徒新年會岡山本行寺に於ては例年の如く信徒の新年會を催したり今其概略を報ずんに左の如し

○婦人新年會四日午後六時梵鐘と共に百五十有餘の會員一同御本尊の御前に靜座し正法興立邪法廢滅國運隆昌寶號萬歳を祈り客殿大廣間に着席能仁上人より日蓮聖人新年觀の顯下に懇篤なる法話ありついで配膳餘興としては大熊健三氏の仕舞字垣安二郎氏三澤榮子女史の談曲今井幸雄氏の御舞水也田祖嶺氏同夫

謹告

一原稿一切は前月三拾日とす  
一御投稿は歡迎致候間概々御寄達相成度候  
一掲載の儀は編輯會の決定に基き採擇可致候  
一義務的廣告の儀は拒絕致候公益若しくは慈善的の件は相當の割引可致候  
一本誌は統一主義宣傳の機關として最も古き歴史を有し毎號堅實の論議を主要致居候へば地方同信の諸氏は可成本誌を愛讀せらるゝ事に精々御勸誘相成度候  
一團體讀誦の場合には統一主義宣傳の美譽として相當の割引可致候  
一機運の然らしむる所々今や本誌の愛讀者は全國の都鄙に勿論海外にまで多くの讀者を有し居り候へば同志の諸君は以後益々奮つて主義發展の爲に努力あらん事を希望致候  
一發行所を、東京市淺草區北清島町十四番地へ變更致候條本誌に關する凡へての用件は爾後同所に於て執務致候右御承知相成度候  
東京淺草北清島町十四番地







廣告

講師博士諸大徳二十餘名講演

日蓮天晴會講演錄第一輯

菊版五號活字十四行三十三字詰八百頁裝釘總ク  
ローズ金文字入 實價金壹圓五拾錢送料拾貳錢

口繪日蓮大聖人御眞蹟講師幹寫眞數葉

光明ある活力ある日蓮主義の具體的説明書は本書なり

深玄高遠なる日蓮主義を何人にも解し易く説明したるものは本書なり

博士學士及宗門諸大僧が信仰の熱血を漙きたる自信録は本書なり

本化の大信仰を味識し心靈修養の基礎を得んとする求道者は速に本書を讀め

目下僅少の殘本あり賣切れぬ内に速に申込みあれ

發行所 東京淺草谷町天晴會事務所

明治三十三年二月十四日 第三種郵便物認可 (毎月一回)

講演

大僧正本多日生師

法華經講演 毎土曜日午後一時半ヨリ

第一義會 毎月第一日曜日午後一時半ヨリ

妙教婦人會 毎月十六日午後一時半ヨリ

日蓮主義青年會 毎月第三日曜日午前十時ヨリ

右東京市淺草區北清島町十四常林寺ニ於テ開會

岡山布教會々合定日

○佛敎演說會(期日未定、山陽紙上は廣告す)

○日蓮研究會(毎月第一、第三土曜日夜)

○日蓮鑽仰會(毎月第二、第四日曜日午後二時)

○婦人會(毎月十五日夜)

○婦人修養會(毎月第一、第三日曜日夜)

以上岡山市山崎町本行寺に於て各公開。

主任講師本行寺住職能仁事一師。

○通常來詣日、毎月一と七の日夜、

但し月始めの二の日はなし

岡山市内山下病院北横頭本法華宗弘通所に於て各公開

統一

第百八十一號